奈佐村に伝わる民謡の分析

Analysis of the folk song which gets across to Nasa village

茨　木　金　吾

Kingo Ibaraki

はじめに

奈佐村は1955年４月１日に城崎郡港村とともに旧豊岡市（2005年４月１日に、周辺の城崎郡城崎町・竹野町・日高町・出石郡出石町・但東町と対等合併し、現豊岡市になるまで）に編入されるまでは独自の行政区域として自治を行ってきた。その奈佐村について記載されたとされる奈佐村誌を見つけることは現在に至っては難しく、安易に閲覧できる状態で保管がなされていない。この奈佐村誌の中にその地域に伝わる民謡が採譜され、伝承されているという情報は、豊岡市の伝承歌（民謡）の傾向を探る基となった“豊岡民話「耳ぶくろ」”の中に記載されており、奈佐節として２曲が太鼓や笛といった鳴り物のパートを除いた単独譜表として採譜され、掲載されている。

前稿において、本稿の調査の対象となった奈佐村と同様に旧豊岡市に編入されるまで、独自の行政区域として自治を行ってきた神美村に伝わる民謡として３曲（“田植歌「鶴の子」”“嫁入唄”“松坂”）を「日本音楽の音楽理論」[2] に基づいて分析し、神美村に伝承される民謡の楽曲構成の傾向を探り、近畿大学豊岡短期大学論集第５号と第６号の中で分析した豊岡市の伝承民謡である“べろべろ節”“松坂節”の分析結果とその分析した内容を比較対照することにより、神美村に伝わる伝承民謡の作られ方の一端を知ることができた。それは、豊岡市に伝承されている民謡と神美村に伝承されている民謡はその作られ方が異なり、豊岡市に伝承されている民謡が呂の五音音階、あるいは律の五音音階で作られた楽曲であるのに対して、神美村に伝承されている民謡は、曲の導入部分に呂の五音音階を取り入れた律の五音音階の構成になっており、呂と律が混在した作られ方をしていることを見て取ることができた。このことは旧豊岡市に伝承されている民謡と神美村に伝承されている民謡の相違点であり、神美村に伝承されている楽曲の特徴である[5] と捉えるにいたった。ただ、“嫁入唄”について律音階でのみ作るという手法が用いられており、豊岡市に伝承される民謡と同一の楽曲構成が見られたことから、隣接する地域との混在を見て取ること[5] ができた。

このように旧豊岡市に編入される以前の行政区域での相違点と隣接する区域との混在点が見られたことから、神美村と同様の行政区域として自治が行われてきた他の行政区域についても、その伝承民謡の相違点と混在点について同様のことがいえるのかを調査することとし、その地域を本稿では奈佐

村に絞り、その区域に残る数少ない譜例を前稿と同様に「日本音楽の音楽理論」[2] に基づいて分析を試みた。その結果、奈佐村に伝わる民謡の楽曲構成の傾向と旧豊岡市に伝わる民謡及び、神美村に伝わる民謡のとの関連性についてひとつの推論を得ることができたので報告する。

調査方法

○　調査楽曲：奈佐村に採譜され、伝わる伝承民謡２曲[1]

①　奈佐節「京仙さん」　②奈佐節「六条さん」

今回の調査楽曲である奈佐節「京仙さん」と奈佐節「六条さん」について、どの様に伝承され、踊られてきたのかを豊岡民話「耳ぶくろ」[1] では次のように伝えている。その部分を引用することとする。

※民謡　奈佐節「六条さん」と「京仙さん」

戦前まで、「六条さん」という歌が、豊岡地方一帯に、ならしおどりとして踊られていた。

それが現在では、奈佐谷だけに残され、その名も奈佐節と称されるようになった。

六条さん節は京都の本願寺法如上人が安永九年城崎入湯の際の歓迎歌と考えられる。

「京仙さん」と呼ばれる歌の生い立ちは、奈佐村誌に次のように解説されている。

京仙さんというのは僧侶の名、筆助さんというのはお弓の夫という。昔、村方では何事によらずもめごとや相談ごとはお寺にもち込んで、解決して貰う風習があった。時には寺から借金した村人が返済に困った末、わが娘を借金のかたに寺奉公させたこともあった。この京仙さんもそれに似た例で、わが嫁を寺にあげる話しだとも解し、六条さんと共に近村一帯に愛唱され、盆には鳴り物入りで、村々で踊られた。（豊岡民話「耳ぶくろ」P.221-P.223より引用）

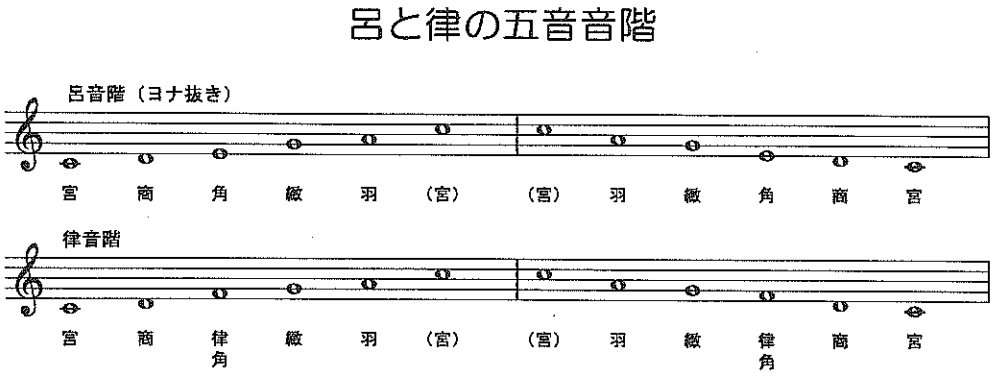
○　調査方法：豊岡民話「耳ぶくろ」（友田眞一、尾形多藻津、小谷茂夫、大垣三郎、中嶋忠雄、山本兵治、松岡重夫、足立栄一、宮岡房次郎編集豊岡市老人連合会発行）に奈佐村誌に残る伝承民謡が２楽曲掲載されており、それらを「日本音楽の音楽理論」[2] に基づき分析を試み、奈佐村に伝わる伝承民謡の楽曲構成の傾向を探った。また、近畿大学豊岡短期大学論集第８号で分析した神美村に伝わる伝承民謡“松坂”“嫁入唄”“田植歌「鶴の子」”、再分析した旧豊岡市に伝わる伝承民謡“べろべろ節”“松坂節”との豊岡市に伝わる伝承民謡の楽曲構成について、その関連性を対比比較することによって探った。

調査結果及び考察

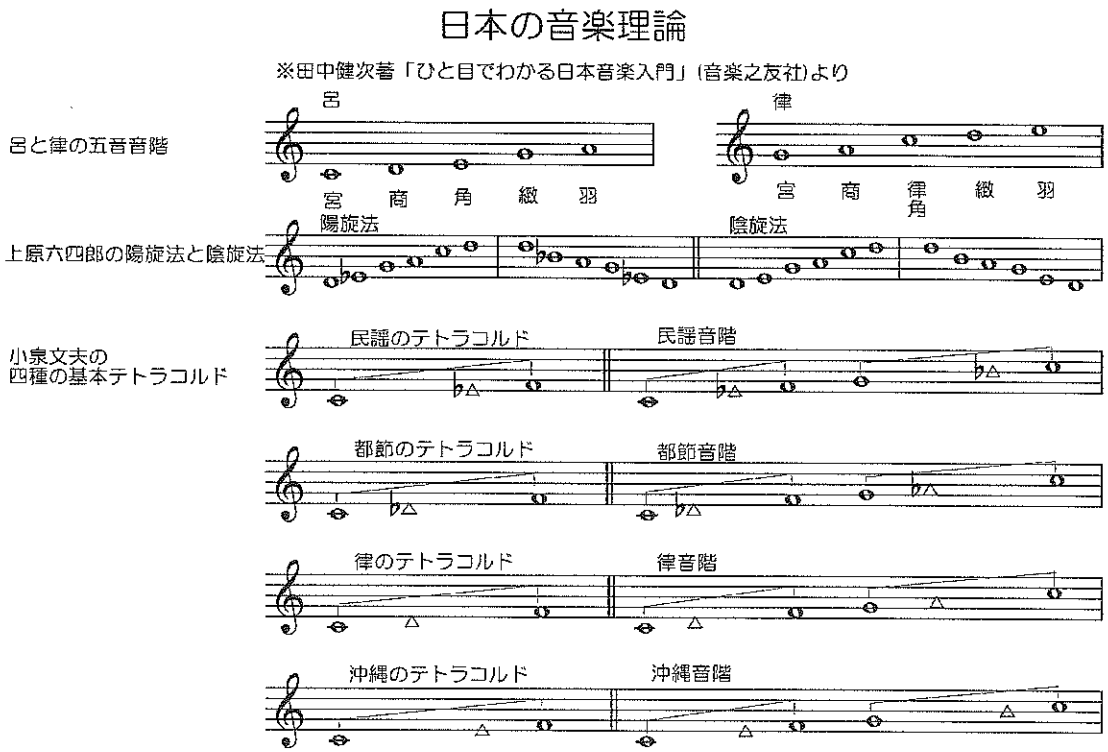
今回の調査によって得ることの出来た楽曲が譜例１の“奈佐節「京仙さん」”[1]、譜例２の“奈佐節「六条さん」”[1] であり、今回の調査のため前稿より転載した楽曲が譜例３の“べろべろ節”[1) 3) 5)]、譜例４の“松坂節”[1) 4) 5)]、譜例５の“松坂”[1) 5)]、譜例６の“嫁入唄”[1) 5)]、譜例７の“田植歌「鶴

の子」”[1) 5)] である。

これらの楽曲は様々な手法で分析することが可能であるが、共通な構成点を見つけるということに視点を置き、前稿同様、日本の音楽理論[2)] の中のひとつである「呂と律の五音音階」「上原六四郎の陽旋法と陰旋法」「小泉文夫の四種のテトラコルド」に基づいておこなった。それを簡略に表したものが図－１の呂と律の五音音階と図－２の日本の音楽理論である。



図－１　呂と律の五音音階



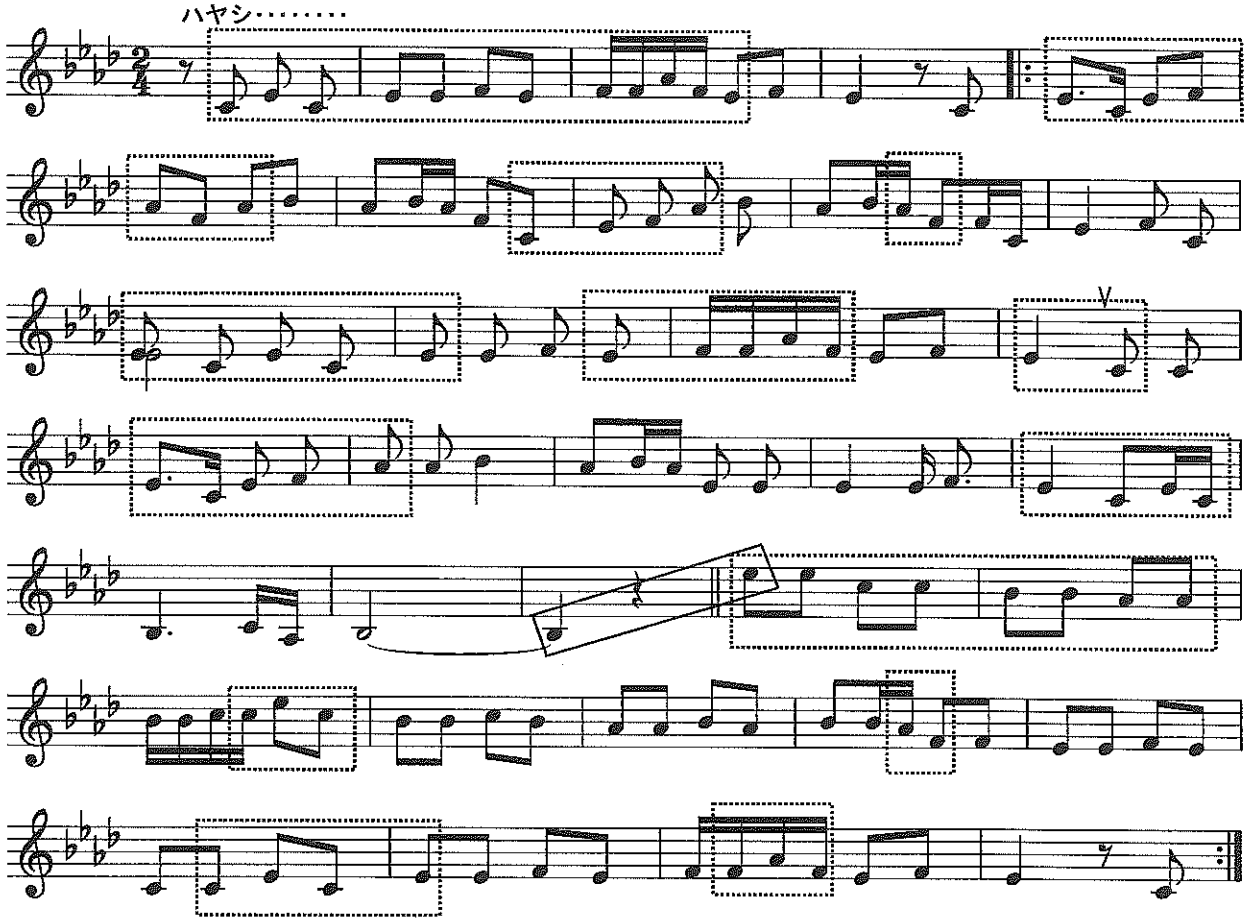
図－２　日本の音楽理論

（譜例１）

奈佐節「京仙さん」

（奈佐村誌より）

採譜　大桐正雄・成田剋治



奈佐節「京仙さん」

一、いやじゃいやじゃわしゃいやじゃ
　　頭の丸いのがわしゃいやじゃ
二、いやな京仙さんの金とるよりもすきな
　　筆助さんの機嫌とる
三、これこれお方これお方
　　どうでも京仙さんと寝にゃならぬ
四、いやでもおうでも寝るのなら
　　布をぬぎなれあさましや

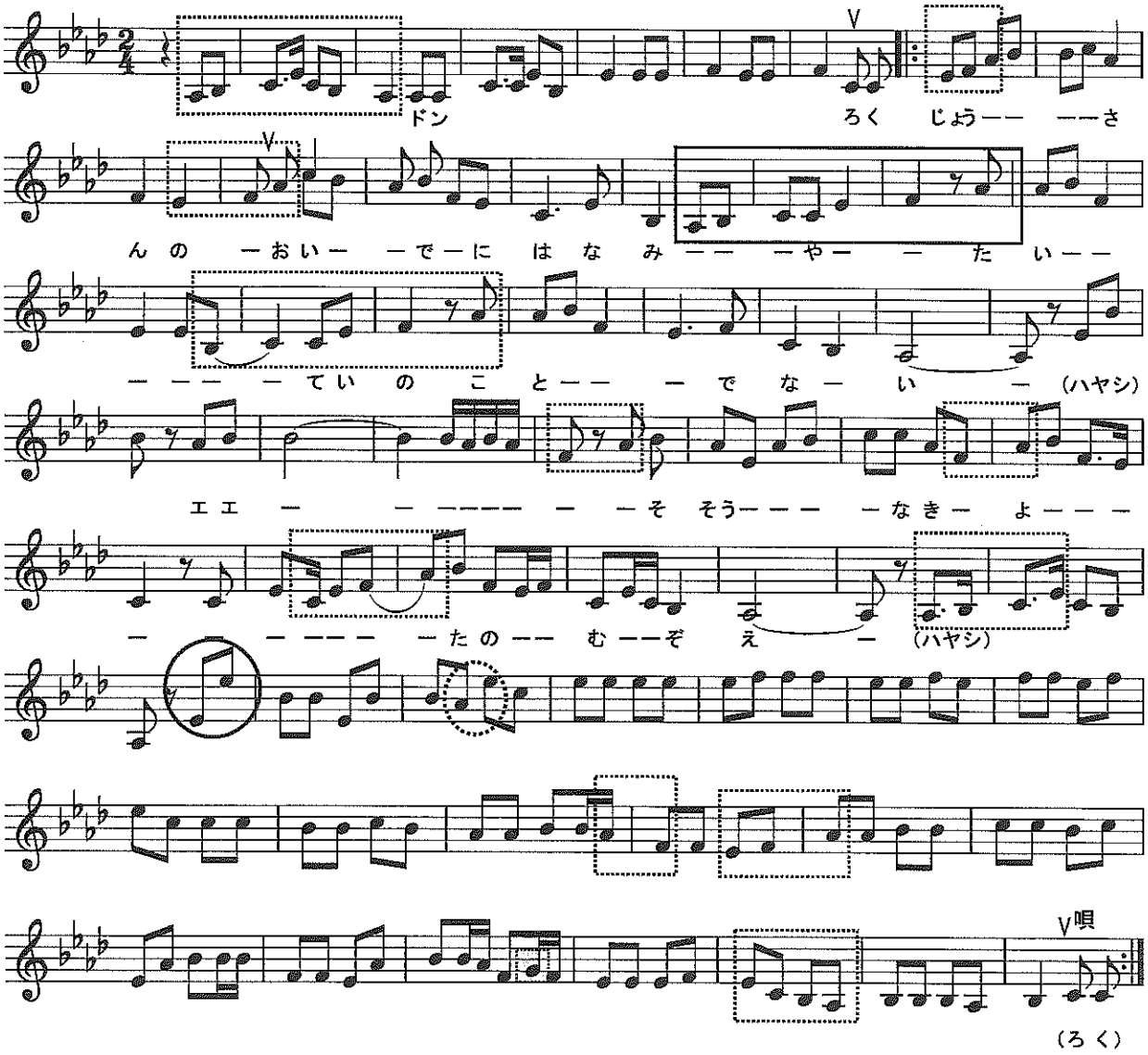
呂音階（ヨナ抜き音階）の傾向が見られる部分

完全11度の跳躍進行が見られる部分

（譜例２）

奈佐節「六条さん」

採譜　大桐正雄・成田剋治



奈佐節「六条さん」

一、六條さんのお出でには並やたいていのことでない
　　エー粗そうなきようたのむぞえ
二、海山へだててこのような知らぬ山家の果てまでも
　　エー悪人助けようばっかりに
三、土手久心に思うにはいかなるごえんでこのような
　　エーお舟のお供をいたすやら
四、水にうつろうお姿を後よりおがむありがたさ
　　エー未来の果てまでお供する
五、わしの父（とと）さん母（かか）さんは京の三条また三条
　　エー合わせて六条じゆす屋町

呂音階（ヨナ抜き音階）の音列で構成されている部分

呂音階（ヨナ抜き音階）の傾向が見られる部分

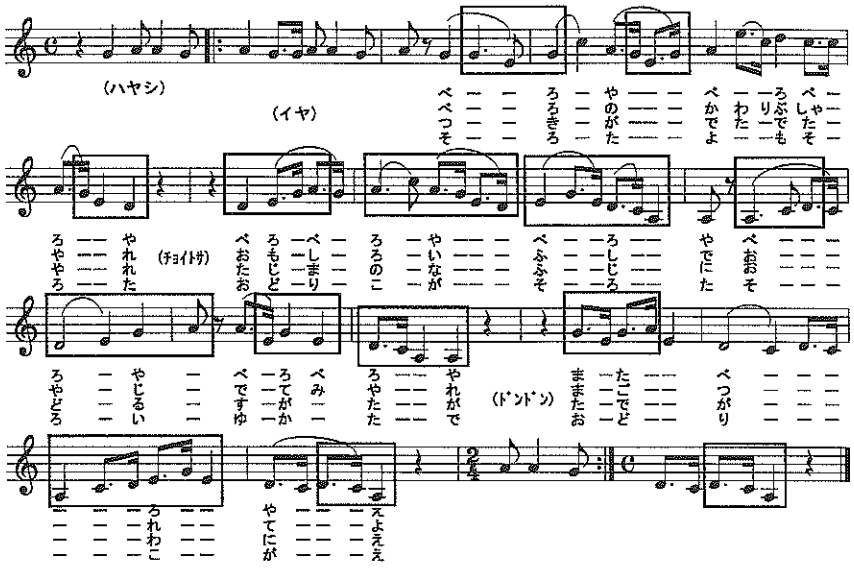
1オクターブの跳躍進行が見られる部分

完全5度の跳躍進行が見られる分部

呂音階の構成音外の音

（譜例３）

べろべろ節



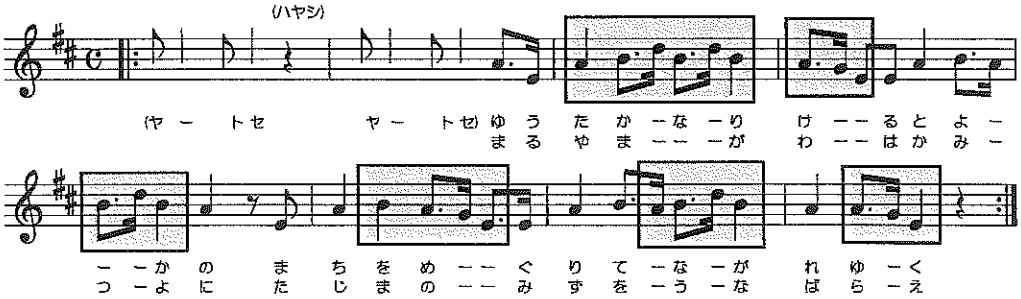
□ 呂音階により構成されている部分

べろべろ節（豊岡民話耳ぶくろより）

べろや　べろべろや　べろや　べろや　べろや　べろべろや　べろや　べろやえ
べろの変わり節や　面白い節で　おやじ出て　見やれ　孫つれて
そろたヨーもそろた　踊り子が揃うた　揃い浴衣で踊り子が
豊岡名産ヤーレ　本場で通る　柳行李に柳かご
豊岡下に出りゃ　二見の清水　飲めば気もよし　涼やかに
月が出た出た　但馬の富士に　踊る姿が夢川に
豊岡良いとこ　朝日を受けて　来日おろしがそよそよと
踊りおどるなら　品よく踊れ　品のよいのを嫁にとれ
踊り疲れりゃ　立野の橋にヤーレ　闇にあの子のほうかむり
ささや松の葉のようにヤーレ　狭い気を持つな　広い芭蕉葉の気を持ちやれ

（譜例４）

松坂節



□ 律音階により構成されている部分

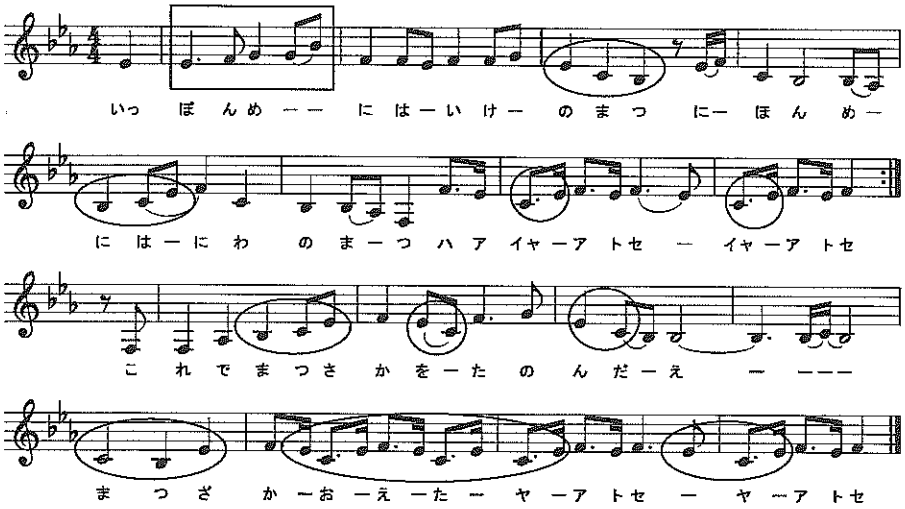
豊岡の「松坂節」（豊岡民話耳ぶくろより）

豊かなりける豊岡の町をめぐりて流れゆく、
円山川は上つ代に、但馬の水を海原え、
放ち玉ひし神々の、霊験業（わざ）御恵みを
殖ゆるばかりの嬉しさは、誰しもそれと三開きの
富士の山程幸福を積んで渡るや京口の
橋を渡りて新町の、桜見よなら旭道、
小尾崎こえて豊田町、万（よろず）宵田の橋こえて、
返すたもとの涼しさは、何時もこゝらの立野橋、
元町すぎて円山の新地に並ぶ掛けあんど、
堀川橋の帰り舟、眺めゆかしき花園に、
柳行李の久保町を、いつしか過ぎて色町の
主のよわいを亀山と、お稲荷様の金山へ、
本懐遂げし義士の墓、名は末代と国々に、
柳細工と諸共に、広まりゆくぞ芽出度けれ

（譜例５）

松　坂

神美村誌より



□ 呂音階により構成されている部分

○ 律音階により構成されている部分

「松　坂」

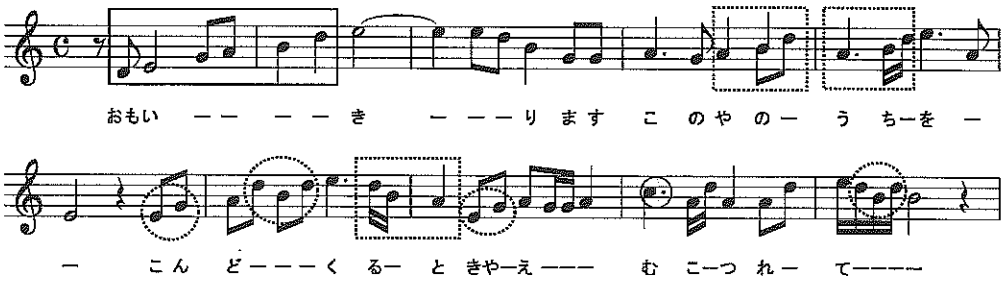
一本目には池の松　二本目には庭の松　ハア イヤ ト セ
これで松坂をたのんだえ　松坂おえた　ヤ アト セ ヤ アト セ

神美村誌より

（譜例６）

嫁入唄

神美村誌より



⬚ 律のテトラコード　○ 律のテトラコードの一端が見られる進行

□ 律音階　◎ 律のテトラコードに該当しない音

「嫁入唄」

門出
一、思い切りますこの家の内を　今度来るときゃェー婿つれて
二、親はとめ竹子はとゆの水　親がやりゃ行くェーどこまでも
三、蝶や花よと育てた娘　今日は他人のェー手にかける
四、笠を片手に皆様さらば　ながのお世話にェーなりました
五、とろりなしや　とろりと出た声なれど　今は出もせぬェー声までも

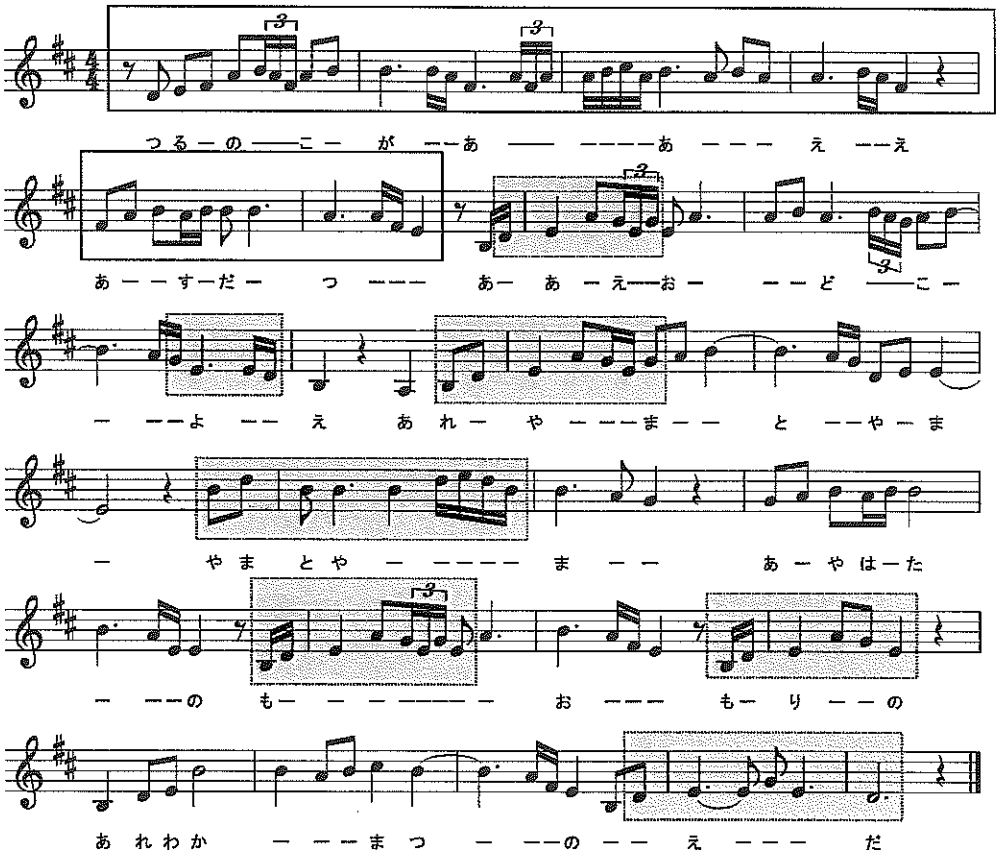
入込み
一、今日は吉日日柄もようて　連れて来ましたェー花嫁を
二、どこよどこよと　尋ねて来たら　此所がお女中のェー部屋なるか
三、目出度し　目出度しが三つ重なりて　鶴が御門にェー巣をかける
四、鶴がな　御門に巣をかける　亀はお庭でェー舞をまう
五、お前百まで　わしゃ九十九まで　共に白髪のェーはえるまで

神美村誌より

（譜例７）

田植歌「鶴の子」

神美村誌より



□ 呂音階により構成されている部分

▒ 律音階により構成されている部分

「田植歌（鶴の子）」

一、鶴の子育つはどこよ　大和大和や　はたの森よ　若松の枝に
二、日は照るともみの傘　もてやれしのはらの　いざさの露の　雨の降る如し
三、早乙女衆は小びるまを待つ　船方は帆柱立て　風の手を待つ
四、面白や京には車　淀には舟　かつらの里で　むかい舟しょうや
五、日の暮れに海辺行けば千鳥なく　又なけ千鳥　声しらべばや　千鳥

神美村誌より

今回の調査は、奈佐村誌に譜表として残る楽曲の中から“豊岡民話「耳ぶくろ」”に記載された２曲を前稿と同様に「日本音楽の音楽理論」[2)]に基づいて分析し、奈佐村に伝承される民謡の楽曲構成の傾向を探り、奈佐村に伝わる民謡の楽曲構成が編入する前の旧豊岡市に近いものなのか、前稿で分析した神美村に伝わる民謡に近いものであるのか、あるいはその奈佐村独自の楽曲構成をされたものであるのかを探ることにより、旧豊岡市に伝承される民謡の楽曲構成の地域性を捉え、それらの関連性を見つけることにより、この地域の民謡の特徴を捉えていった。

その結果と分析内容は次の通りである。

1．奈佐村誌に残る伝承民謡について

調査楽曲として奈佐村誌に採譜され、“豊岡民話「耳ぶくろ」”に譜表として残る伝承民謡２曲を日本の音楽理論[2]の中のひとつである「呂と律の五音音階」「上原六四郎の陽旋法と陰旋法」「小泉文夫の四種のテトラコルド」に基づいておこなった結果、次のようなことがわかった。

“奈佐節「京仙さん」”“奈佐節「六条さん」”共に図－１と２の「呂と律の五音音階」の理論が適応でき、呂の五音音階（Ａb・Ｂb・Ｃ・Ｅb・Ｆ・（Ａb））により構成されていることがわかる。

中でも譜例２の“奈佐節「六条さん」”は呂音階（ヨナ抜き）の音列そのもの（Ａb・Ｂb・Ｃ・Ｃ・Ｅb・Ｆ・（Ａb）で構成されており、呂の音階にリズムをつけて作られている。このことはこの奈佐節に見られる大きな特徴であると捉えることができ、“奈佐節「六条さん」”はその代表的な楽曲といえよう。このように呂音階（ヨナ抜き）の傾向が多く見られることから、この奈佐村に伝承されてきた民謡は呂音階が主流で構成されたものではなかろうかと推察できる。

また、“奈佐節「京仙さん」”には、おそらくハヤシの部分に移行する部分であろうが、ＢbからＥbに跳ぶ完全11度の跳躍進行があり、“奈佐節「六条さん」”の中にもハヤシの部分でＥbからＥbへ１オクターブ（完全８度）跳ぶ跳躍進行とＡbからＥbへ完全５度跳ぶ跳躍進行がみられる。これも奈佐節の大きな特徴とみることができる。ただ、“奈佐節「六条さん」”の中に非音階音であるG音が含まれているが、一カ所のみの構成であることから経過音的扱いとして見て差し障りがないように思われる。

2．旧豊岡市に伝承される二大盆踊り唄“べろべろ節”“松坂節”との関連性について

前稿において旧豊岡市に伝承される二大盆踊り唄“べろべろ節”“松坂節”については「呂と律の五音音階」の理論が適応でき、再分析の結果、“べろべろ節”は呂の五音音階（C･D･E･G・A）で作られており、“松坂節”は律の五音音階（D･E･G・A・B）で作られた楽曲であり、それぞれの音階でのみ楽曲全体を構成している[5]ことがわかったが、今回調査した奈佐節の２曲は、この二大盆踊り唄の一つである“べろべろ節”同じ呂の五音音階で作られていることから、この楽曲の構成には関連があるものの、もう一つの“松坂節”には律の五音音階で構成されていることから何ら関連を持たないことがわかった。

3．神美村誌に残る伝承民謡“松坂”“嫁入歌”“田植歌「鶴の子」”との関連性について

神美村誌に残る伝承民謡である“松坂”“嫁入歌”“田植歌「鶴の子」”の３曲は、曲の導入部分に呂の五音音階を取り入れた律の五音音階の構成になっており、呂と律が混在した作られ方をしていることが３楽曲中２楽曲に見られたことから推察でき、旧豊岡市に伝承されている民謡と神美村に伝承される民謡の相違点であり、神美村に伝承される楽曲の特徴である[5]と捉えることができた。ただ、“嫁入唄”については律音階でのみ作られており、旧豊岡市に伝承される民謡“松坂節”との楽曲構

成の同一性[5]が見られた。これらは明らかに奈佐節とは異なり、奈佐節が呂の五音音階で構成されているのに対して、神美村に伝承される民謡は律の五音音階で構成されており、その楽曲の構成のされ方に大きな相違点を見ることができた。

４．奈佐村に伝承される民謡と旧豊岡市に伝承される民謡、神美村に伝承される民謡の関連性について

編入されるまでの旧豊岡市を中心として、西に位置する奈佐村と東に位置する神美村の行政区域の異なりが表れており、西にある奈佐村はその民謡が呂の五音音階で作られ、東にある神美村はその民謡が律の五音音階で作られ、その中央に位置する旧豊岡市の民謡は呂の五音音階と律の五音音階が混在した作られ方をしていることから西と東で独自の音階により作られた楽曲が、その間に位置する区域で混じり合い、さらに独自の音階へと変遷し、楽曲ができあがっていったであろうことが推察できる。

従って、旧豊岡市には呂の五音音階で作られた伝承民謡と律の五音音階で作られた伝承民謡が存在するのであって、中でも“松坂節”は呂の五音音階と律の五音音階が混在した形でその楽曲が構成されているのである。これらのことから近隣の村と村が統合されたり、大きな村に小さな村が編入される度にこうしたことが繰り返されてきたのではなかろうかと考察できる。

要　約

奈佐村誌に譜表として残るとされる楽曲の中から“豊岡民話「耳ぶくろ」”に記載された２曲を前稿と同様に「日本音楽の音楽理論」[2]に基づいて分析し、奈佐村に伝承される民謡の楽曲構成の傾向を探り、奈佐村に伝わる民謡の楽曲構成が編入する前の旧豊岡市に近いものなのか、前稿で分析した神美村に伝わる民謡に近いものであるのか、あるいはその奈佐村独自の楽曲構成をされたものであるのかを探ることにより、旧豊岡市に伝承される民謡の楽曲構成の地域性を捉え、それらの関連性を見つけることにより、この地域の民謡の特徴を捉えていった。

その結果、今回の調査と分析により得られた奈佐村に伝承される民謡の楽曲の構成と前稿の調査と分析によって得られた神美村に伝承される民謡の楽曲構成、旧豊岡市に伝承される民謡の楽曲構成の分析内容から次のようなことが推察できた。

近隣の村が編入されるまでの旧豊岡市を中心として、西に位置する奈佐村と東に位置する神美村の行政区域の異なりが伝承民謡の楽曲構成にも表れており、西に位置する奈佐村はその民謡が呂の五音音階で作られ、東に位置する神美村はその民謡が律の五音音階により作られ、さらにはその中央に位置する旧豊岡市の民謡は呂の五音音階と律の五音音階が混在した形で作られ、西と東の行政区域で作られた呂と律による独自の伝承民謡が、その中心に位置する区域で接触し、混じり合い、さらに呂と律が混在した独自の伝承民謡へと変遷していったのではないかと思われる。

従って、旧豊岡市には呂の五音音階で作られた伝承民謡と律の五音音階で作られた伝承民謡が存在

するのであり、中でも“松坂節”は呂の五音音階と律の五音音階が混在した形でその楽曲が構成されているのである。このことは近隣の村と村が統合されたり、大きな村に小さな村が編入される度に繰り返されてきたのではないかと考察でき、その度に新しい民謡が誕生していったのではなかろうかと推論するにいたった。

引用文献

1）友田眞一　尾形多藻津　小谷茂夫　大垣三郎　中嶋忠雄　山本兵治　松岡重夫　足立栄一　宮岡房次郎：豊岡民話「耳ぶくろ」、1-256，豊岡市老人連合会（兵庫），1975

2）田中健次：一目でわかる日本音楽入門、1-175，音楽之友社（東京），2003

3）茨木金吾：盆踊り唄「べろべろ節」の採譜と分析，1-13，第５号，近畿大学豊岡短期大学論集、近畿大学豊岡短期大学，2008

4）茨木金吾：盆踊り唄「松坂節」の採譜と分析，9-18，第６号，近畿大学豊岡短期大学論集、近畿大学豊岡短期大学，2009

5）茨木金吾：神美村に伝わる民謡の分析，19-26，第８号，近畿大学豊岡短期大学論集、近畿大学豊岡短期大学，2011

参考文献

1）黒沢隆朝：楽典、11－227，音楽之友社（東京），1966

2）東洋音楽学会：東洋音楽研究第20号、１－192，音楽之友社（東京），1969

3）早稲田みな子：南カリフォルニアの盆踊り，62-78，第52巻１号，音楽学、日本音楽学会，2006

4）高柳蕗子：拾い読みする囃子言葉、「かばん」特別号特集オノマトペ，三月書房（東京），1997

5）服部龍太郎：日本民謡全集、1-320，角川文庫（東京），1965

6）F. T. Piggott，服部龍太郎訳：日本の音楽と楽器、1-253，音楽之友社（東京），1968

7）吉川英史：日本音楽の歴史、1-469，創元社（大阪），1971

8）町田嘉章・浅野建二：日本民謡集、1-220，岩波文庫（東京），1960

9）たじまのうたまつり実行委員会:たじまのうた第１集、1-100，たじまのうたまつり実行委員会，2006

10）たじまのうたまつり実行委員会:たじまのうた第３集、1-100，たじまのうたまつり実行委員会，2009